自殺権

壱岐　ルイシ　（一枚目）
　　ルイミ　（ルイシの妹）
我仁田　リシ（実体験原理主義の著名小説家・ガニタ リシ）
差辻　タイシ（自殺志願の引きこもり・サツジ タイシ）
匕夕（さじがた）　申示（しんじ）（六枚目・国家特務生命部門通達課所属実働係）
父さん（ルイシ我仁田リシと兼役）
壱岐　レイナ（差辻タイシと兼役）

【幕前／開演前】

舞台上手から燕尾服を来た細身の男、匕歹（さじがた）　申示（しんじ）が登場。杖を突いてはいるが、別にどこかが悪そうというわけではない。

匕歹　　高い位置から失礼します。

舞台中央に立ち、一礼。

匕歹　　どうも皆さんこんにちは。私（わたくし）、国家特務生命部門通達課所属実働係の、匕歹　申示と申します。僭越ながらこれから私が、前説いやさ記者会見の方をさせていただきます。本日は足元が悪く日差しの強い中お越しいただき誠にありがとうございました。私、匕歹 申示。本日は２XXX年つまり〈自殺権売買法〉施行から十周年のアニバーサリーに関する発表をするために馳せ参じました。

記者　　はい！
匕歹　　どうかしましたか。質問ならこの後に――――
記者　　はい！
匕歹　　いやですから――――
記者　　はい！
匕歹　　・・・・・なんですか？
記者　　はい。そもそも〈自殺権売買法〉とは何なんですか？
匕歹　　あなた・・・、記者のくせにそんなことも知らないんですか？
　　学校で習わなかったんですか？
記者　　自分、たたき上げですので
匕歹　　そう言う問題ではないと思うんですが・・・
　　まあいいでしょう。

手を叩くと会場全体が暗くなり、匕歹にスポットが当たる。

匕歹　　^自殺権売買法V。それは――――ああ、「ばいばい」と申しましても、それは勿論、手を振るほうの「バイバイ」ではございませんよ？「売り買い」の方の「ばいばい」でございます。・・・・・そう！！ 自殺をする権利を売り買いするのでございます！この舞台の時系列からおおよそ１０年前、 慢性的な財政難と自殺者

数の増加に悩みあぐねた政府が打ち出した至高の策！ 最初こそ――――

記者　すみません、もうそのへんで・・・

七歩　シャラップ！！

七歩、杖を取材者に向かって指す。

記者　シャラップって・・・+

七歩　黙らっしゃい！

記者　黙らっしゃい！？

七歩　この法律、少々初見でのインパクトが強く聞こえてしまうことが唯一と言っていいほどの欠点で御座いまして、まさにアキレスの腱、ジークフリードの菩薩樹の葉の痕、この法律にはできた当初、多くの物言いが寄せられました。

七歩、喉を鳴らして声色を変える。

七歩　「この法律は自殺を助長する！」（力強い青年の声）「権利を売り買いするとは何事だ！」（しゃがれた老人のような声）「二番目じゃダメなんですか？」（芯の通った張りのある声）等々、等々、等々！（だんだんと地声に戻りながら）

咳払いを一つ。

七歩　おっと、失礼。話が脇に逸れました。

襟を正す。

七歩　まあ要するに、〈自殺権売買法〉とは、自殺する権利を政府が管理し、その所有権を売り買いする法律だと言うことさえ理解していただければ十分でございます。

七歩、一礼をして去ろうとするが何かを思いだして元の位置に戻る。

七歩　ああ、そういえば……というよりは実はこちらが本題なのですが、お越しくださった記者の皆様に、二三ほど注意していただきたい事がございます。一つ、劇場内でのご飲食はご遠慮ください。一つ、上演中のお客様同士での私的な会

話、携帯電話などでの通話はご遠慮ください。一つ、カメラ・携帯・スマフォ等々といった記録媒体での録音、録画、撮影はご遠慮ください。中央辺りにカメラが立っておりますが、それは私たち運営側のものでございますので。あとは・・・・・、まあ、これくらいでいいでしょう。うん。
それでは皆様、ここからはお待ちかねの質疑応答の時間とさせていただきます。質問のある方。

我仁田　はい！

匕夕　はいそこのあなた！

我仁田　〈自殺権売買法〉についていくつかご質問が！！

匕夕　はいはい――――

BGMのフェードアップに合わせて、フェードで暗転

【ルイシの部屋／夏休みのある日の朝】

ルイシの部屋。一般的な学生の部屋。窓の景色から二階であることが伺い知れる。
勉強机と本棚。洋服掛けに水色のカーテン。どこの家にでもありそうなベッド。
勉強机には伏せられた写真立て。
本棚には本で八割が埋まっているが、若干漫画の占める割合の方が多いようだ。
洋服掛けには、今日着る分の洋服が一式と、黒のスーツと黒のネクタイがかけられている。
水色のカーテンは閉じられている
ベッドの頭もとにはクマのぬいぐるみと目覚まし時計。
目覚まし時計の音がけたたましく響く。
数コールほど音がなってベッドがもぞもぞと動くが、すぐに止まる。
そこからまた数コールほど音がなる。
今度は目覚まし時計に手をかける――――思いきや、クマの人形の頭を鷲掴みにしてベッドの中に引き込んだ。
そこからまた数コール音が鳴る。
部屋の外から妹、ルイミの声が聞こえてくる。

ルイミ　ルイシー！目覚ましうるさいよ！早く起きなー！

ルイシ、起きない。
鳴り響く目覚まし時計。

ルイミ　おーきーろー！
ルイシ　あーいーよー

ルイシ、やっと布団から出る。もたもたと目覚まし時計を止める。

ルイミ　ご飯できてるからねー
ルイシ　ういー

ルイシ、うつろうつろしながら、寝間着から着替えていく。
漸く着替え終わり、ドアの方に行くと思いきやベッドの前に立つ。
ルイシ、ベッドに倒れこむ。

ルイミ　いや起きろや！！

言いながら、ルイミが部屋に入ってくる。

ルイミ　一回ちゃんと返事しただろうが！

ルイミ、ルイシを枕でしばく。

ルイシ　いて、いてえよ！

ルイミ　嫌だったらサッサと起きな！

ルイミ、さらに激しくルイシをしばく。

ルイシ　はいはいはいはい！起きますよ！起きました！

ルイミ　はーい。おはようございます。

ルイシ　・・・・・おはようございます。

ルイミ、カーテンを開け外の光を入れて、勉強机の前に座る。

ルイミ　早く下降りて準備しなよ。早くしないと大学遅刻しちゃうよ。

ルイシ　無いから大丈夫。

ルイミ　無くても、学校はあるんだから――――は？なんて？

ルイシ　だから、ないの。学校。

ルイミ　はー！？なんで！？

ルイシ　なんでって、俺の学校まだ夏休みだし。

ルイミ　なんで教えてくれないの？ ルイシの分の朝ごはんつくっちゃったじゃん！

ルイシ　言ったよ。

ルイミ　えー、いつー？

ルイシ　夏休み前。

ルイミ　そんなの夏休みのごたごたで忘れちゃったよ～

ルイシ　・・・・・

ルイミ　・・・・・え？じゃあ何？今日学校あるのって私だけ？ルイシは学校無いの？

ルイシ　だからそう言ってるでしょ。

ルイミ　じゃあなんで、目覚ましなんてかけたのよ～。

ルイシ　夏休み中もずっとかけてただろ。お前は最初と最後の方は、昼まで起きてこなかったから知らんだろうけど。

ルイミ　中盤はめっちゃ早く起きてたもん。

ルイシ　じゃあ何時くらいに起きてた？
ルイミ　５時

ルイミ、どや顔。

ルイシ　何時に寝てた？
ルイミ　４時
ルイシ　寝てないだけだろうが！！
ルイミ　早起きに変わりはないでしょ。

ルイミ、どや顔続行。

ルイシ　はあ、じゃあ俺が夏休みの間も目覚まし時計かけてたのも知ってるだろうに。
ルイミ　いや、意識が朦朧としてて覚えてない。
ルイシ　やっぱ寝てねえだけじゃねえか！！
ルイミ　私はショートスリーパーだから大丈夫なの。
ルイシ　意識が朦朧としてる時点でショートスリーパーなわけないでしょうが
ルイミ　細かいな〜

ルイミ、片手間にルイシの勉強机を物色する。

ルイシ　何してん
ルイミ　ぶっしょくー
ルイシ　なんもないでんがな
ルイミ　なんで関西弁？　しかもなんか腹立つ感じの
ルイシ　お郷(くに)の言葉が出た
ルイミ　あんたの生まれは東でしょうが
ルイシ　東過ぎて西になった
ルイミ　出身地は動かねえよ。……なんか、怪しいな。
ルイシ　怪しくあらへん

否定するがルイシの声は上ずって震えている。

ルイミ　怪しい。あ、これ何？

ルイミ、紙束が入った茶封筒を見つける。

ルイシ　ヘイ。

ルイシ、両手で拳銃を作ってその銃口をルイミに向けている。声色はジャックバウアーっぽい。

ルイシ　ヘイ、ガール。その封筒を今すぐ元の場所に戻すんだ。
ルイミ　レディと呼びな。何？さっきから何か変よ？まさか……
ルイシ　いいから戻すん――――
ルイミ　あんた……
ルイシ　――――何もない。何もないから早くそれを――――
ルイミ　セクシーな本でも入ってんじゃないの～

ルイミ、封筒を開けようと口に手をかける。
ルイシ、開けられる前に封筒を奪い、ルイミから距離を置く

ルイシ　ふう、ミッションコンプリート。
ルイミ　あーその慌てよう！やーっぱそうなのね。これだから男ってやつは。不潔不潔う
ルイシ　今朝のニュースの話でもしないか？
ルイミ　話題のそらし方へたくそか。だいたい、ルイシは今の今まで寝てたんだから、今朝のニュースなんて見てないでしょ。

ルイシ、茶封筒をもとの場所に戻す。

ルイシ　おう、だから教えてくれ
ルイミ　この、愚兄は。
ルイシ　愚妹には絶対に言われたくない。
ルイミ　そんなに聞きたいの？ 今朝のニュースなんか。
ルイシ　いいや、言うほど。でも話題がない。

ルイミ、何か言おうとするが、諦めて呆れ顔をする。

ルイミ　はあ、もういいや。
ルイシ　よし、じゃあ、教えてくれ。
ルイミ　……聞いてて気持ちのいいニュースじゃないよ？

ルイシ　そういわれると逆に聞きたくなるのが人の性。
ルイミ　後悔しない？
ルイシ　しないしない、しないから教えてよ。
ルイミ　……〈自殺権〉のニュースだったよ

（間）

ルイシ、少し複雑な顔をしてから、何か思いついたような顔になる。

ルイシ　もしかして、廃止されたとか？
ルイミ　いや、五周年記念だって。
ルイシ　あ、そう……
ルイミ　……なんか、当たるんだって。
ルイシ　へ？　何が？
ルイミ　〈自殺権〉。抽選五名。
ルイシ　はぁ！！？
ルイミ　うわぁ！　何？　急に。
ルイシ　いや、太っ腹だなあって。（どことなく誤魔化すように）
ルイミ　そう？
ルイシ　そうだよ。だってあれ、何億円もするんだろ？
ルイミ　マジで？　そんなするの？
ルイシ　そりゃあ、人権だからな。
ルイミ　はぇ～、そんだけあれば、当たったら売って一生遊んで暮らせるね。
ルイシ　いや、売れないだろ。
ルイミ　え？〈自殺権〉ってそんなに人気無いの？
ルイシ　違うよ。そもそも個人で売っちゃダメなんだって。
ルイミ　えー、なんでー。
ルイシ　そりゃあ、人権だからな。……てか、学校で習うだろ。
ルイミ　〈自殺権〉の授業の時だけ寝てた。
ルイシ　ちゃんと受けろよ。
ルイミ　知ってるでしょ。　私あの法律嫌いなの。
ルイシ　好き嫌いの問題じゃないでしょうに…。
ルイシ　ていうか、お前時間大丈夫なのか？　結構いい時間になってんぞ。
ルイミ　え？　ほんとだ！！　やばい、どうしよう。絶対間に合わない、絶対に遅刻だよー。
ルイシ　ドンマイ。
ルイミ　うるさい！　ああ、もう！　朝ごはんちゃんと食べててよ！？

ルイミ、慌てて部屋を出て行く。階段の音。

ルイシ　あっぶねー！もうちょっとで中身見られるところだった。いや～、今度からはもっと複雑なところに隠した方がいいな。どこ隠そうかな。ここにしようかな（椅子のクッションを捲る）。いや、座ったらバレるよな…。じゃ、ここか？（窓の外を見る）。

ルイシ、外にいるルイミと目が合う。（舞台外）

ルイミ　どうしたのー？
ルイシ　いやー！行ってるかなって思って。
ルイミ　あーそう。じゃあ、行ってきまーす！
ルイシ　いってらっしゃーい。気をつけてー。……いやあ、さすがに駄目かあ。じゃあどこがいっかなあ……

ルイシ、隠すのにちょうどいい場所を、ぶつぶつ言いながら探し始める。
部屋の外から階段を上る音が聞こえる。
匕歹、勢いよく扉を開けながら入ってくる。
黒子達、あとから続く。

匕歹　どうも、こんにちは。
ルイシ　うわっ！ビックリした！

ルイシ、机の上に封筒を置く。

匕歹　は～、いい部屋ですね～。おしゃれ～。
ルイシ　え！？なに、何？
匕歹　かわいい人形ですね。
ルイシ　返せよ！
匕歹　あら、これは？（机の上の茶封筒を手に取る）
ルイシ　おい！（茶封筒を引っ手繰って元の場所に伏せる）いったい何なんだよ！あんた誰だよ！何しに来たんだよ！てか、どうやって入ってきたんだよ！

匕歹、少しぽかんとしてから納得したような顔をする。

七歹　ああ、すみません。私としたことが、自己紹介を忘れておりました。初めまして。私、国家特務生命部門通達課所属実働係、七歹　申示　と申します。以後、お見知り置きを。

ルイシ　はあ？

七歹　あらあら、聞こえませんでしたか？ ではもう一度。私、こっ――――

ルイシ　そういうことじゃないんだよ！ ああ(頭を掻く)……もう、一体何なんだよ！ どうやってここに入ってきたんだよ！ いったい何しに来たんだよ！ 警察呼ぶぞ！

七歹　おっと、それは困る。

ルイシ　知るか！

七歹　説明したいのはやまやまなんですが、あと一人ここにお呼びしないといけない人がいまして。

ルイシ　誰だよ！ これ以上勝手に人を入れんじゃねえよ！

七歹、窓から外を見る。

七歹　あ、そろそろ来ますね。

外からルイミの叫び声が聞こえてくる。
階段をドタバタと上る音と、ルイミの喚き声が聞こえる。

ルイシ　ルイミ！？

ルイミ　なんか行く途中にムキムキのマッチョたちがいてとうせんぼしてたんだけど！

七歹　揃いましたね。やはり家族にもお伝えしないと。

ルイシ　揃いましたね、じゃねえんだよ！

ルイシ、七歹に詰め寄る。
七歹、喉元に杖を突きつけてルイシを止める。

七歹　落ち着きください。私たちは別に人攫いだというわけではないのです。

ルイシ、めちゃくちゃビビりながら引き下がる。
七歹、それを納得したように見ながら杖を手元に戻す。

ルイミ　え！？ ちょ、ルイシ！？

七夕、襟を正して佇まいを治す。

七夕　改めまして。私、国家特務生命部門通達課所属実働係、七夕　申示　と申します。本日から数日間貴方の家にお邪魔させていただくことになりました。

ルイシ　どういうことだよ

七夕　おおっと、私としたことが肝心要（かなめ）の要件を伝え忘れていましたね。ドラムロール！！

ドラムロールの音が響き、結果発表の時のような照明。

ルイシとルイミ、何が何だかわからない。

ルイシ　どっからなってんだこの音！？ なんだこの照明！？

七夕　ハイドーン！

ドラムロールが止まり、ピンスポットがルイシに当たる。

七夕、拍手。

七夕　おめでとうございます！！ 壱岐 ルイシさん、あなたに＜自殺権＞が当たりました！

ルイシ　は？ 何？

ルイミ　当たりましたって・・・・・もしかして朝テレビで言ってたやつ！？

七夕　その通り！ 壱岐 ルイシさん、貴方は ＜自殺権売買法＞ 施行五周年記念、 ＜全国自殺権籤（くじ）＞ に当選しました！

七夕、大袈裟な仕草と身振り手振りでとてもにこやかな顔をしている。

黒子達、部屋にあるものに興味深々。

ルイミ　いるわけないでしょ、そんなもん！

ルイシ　・・・・・

七夕　さらに今回は出血大サービス！ 今回に限り、ルイシ君には死因も自分で決定する権利を差し上げます！ 水死・焼死・病死・老死・失血死、エトセトラ、エトセトラ。好きなものをお選びください。

ルイシ　・・・・・

ルイミ　死に方も何も、そもそもそんなのいらないわよ！ ルイシ、早くそんなものいらないって言って！ こいつら追い返して！

ルイシ　・・・・・

ルイミ　……どうしたの？　さっきからずっと黙って。
七歩　まあまあ、そうせかさないで上げてください。決めるのは彼なんですから、そうすぐ答えを出すことはできませんよ。
ルイミ　だから、さい――――
ルイシ　……少しだけ、考えさせてくれ。
ルイミ　はあ！？　何考えてんの！？　そんな――――
七歩　承りました。
ルイミ　承らなくていいから！
七歩　決めるのはルイシ君ですから。
ルイミ　だから！　いらないんだって！
七歩　決めるのは、ルイシ君ですから。
ルイシ　七歩さん、もう帰ってくれ。時間が欲しいんだ。二三日くらい。
ルイミ　ルイシ！
七歩　解りました。それではそろそろ、お暇させていただきます。

七歩、ドアを開け一礼して退出。

ルイシ、溜息をつく

ルイミ　どういうこと？
ルイシ　……どういうことって？
ルイミ　わかるでしょ？　さっきの話よ。<自殺権>なんて、考えるまでもなく要らないじゃない。
ルイシ　貰えるものは貰っとこうと思ってな。
ルイミ　ふざけないで。
ルイシ　……相当のものを貰うんだ。それなりに考えてから答えを出さないと、欲しがってる人に失礼だろ。
ルイミ　しょうもない嘘つかないで。いちいちそんなこと考えるたまじゃないでしょ。

ルイシ、溜息。

ルイシ　……何でもいいだろ。理由なんて。とにかく考えたいんだよ。

ルイシ、ベッドの上に座る。

ルイミ　考えたらって、考える余地があるってこと？　<自殺権>を使うことがあるってこ

と？
ルイシ　ゼロじゃない。
ルイミ　本気？
ルイシ　結論はそうなるかもしれない。
ルイミ　自殺したいの？
ルイシ　そうかもな。
ルイミ　なんで自殺したいの？
ルイシ　自殺したいって言ってるやつにそれを聞くか？
ルイミ　生きたくないから自殺するの？　死にたいから自殺するの？
ルイシ　……
ルイミ　ねえ。
ルイシ　死にたくねえよ。
ルイミ　じゃあなんで。
ルイシ　……生きていたいし、死にたくないけど、死なないと。
ルイミ　え？　どういうこ――――
ルイシ　学校、行かなくていいのか。時間とっくに過ぎてんだろ？
ルイミ　いや、そんなこと気にしてる場合じゃ――――
ルイシ　行ってこい。

ルイミ、部屋を出て行く。階段を降りる音。

ルイシ　はあ…

どこかから匕歹の声が聞こえてくる。
ルイシ、驚く。

匕歹　兄弟喧嘩は感心しませんね。
ルイシ　うお！　この声は…匕歹さん？
匕歹　その通り。

匕歹、窓から入ってくる。

ルイシ　どっから入ってきてんだよ！
匕歹　玄関の方の鍵を貴方の妹さんが閉めてしまったので。
ルイシ　普通にインターホンを鳴らしてくれよ。
匕歹　そんな普通に入ってきたら一回目のインパクトに負けてしまうじゃないですか。

ルイシ　知らねえよ。

ルイシ、ベッドの上に座る。

ルイシ　何しに戻ってきたんだよ。

七夕　今日はこの後の仕事がなかったことを思いだしまして。

ルイシ　戻ってくる理由にはならないだろ。

七夕　お話ししたかったんですよ。

ルイシ　俺はしたくないね。

七夕　そう言わずに。^自殺権>のお話でもしませんか。

七夕、勉強机の前の椅子に足を組んで座る

手にはベッドの頭もとに置いてあったクマのぬいぐるみを持って手すさびをしている。

ルイシ　・・・・・はあ。どんな話だよ。言っとくけど、学校で習うようなことは普通に知ってるからな。

ルイシ、言いながら七夕からぬいぐるみを取り上げ、元の位置に戻して再びベッドの上に座る。

七夕　知っているだけでしょう。解っているわけではないはずだ。

ルイシ　どういうことだよ？

七夕　知識を持っているからって、理解が伴っているとは限らないということですよ。例えば、１１８５年に鎌倉幕府が建てられた事は知っていても、その当時の人々が何を考え、感じたのかなんて知りもしないでしょう？

ルイシ　・・・なんとなくだけど言いたいことは分かる。

七夕　それを^自殺権>に当てはめてお話しましょう、と言いたいのです。

ルイシ　自殺権を手に入れた人間の、思考とか感情を教えてくれるってことか？

七夕　その通り。^自殺権>を貰うかどうかを決めあぐねておられるルイシ君の一助になると思いまして。

ルイシ　仕事は終わったんじゃないのか？

七夕　そうですよ。ですので、これは私の個人的なおせっかいです。

ルイシ　要らないおせっかいだと思うがね。

ルイシ、ベッドの上に両足を乗せ深く座り込み、後ろの壁にもたれかかって言外に話す

ように促す。
七歹、その様子を見て椅子から立ち上がり話始める。

七歹　　まま。それではまず手始めに、嫋(たお)やかで凛とした、舞台狂いのとある女性の噺でも。

舞台、薄暗くなる。
上手側にスポットが当たる。

七歹　　とあるところに、売れない劇団に所属しているそれはそれは美しい女性がいました。

部屋の扉が開けられ、スポットの位置にロングヘアの鬘(かつら)をかぶった 我仁田 リシと黒子が立つ。これから我仁田は七歹の話に合わせて動く。

七歹　　彼女は小さき頃より演劇を心から愛しておりました。寝ても覚めても演劇のことばかり。

我仁田が立っていたスポットが消え、ベッドに当たる
我仁田、七歹の話に合わせてベッドへと動く。

七歹　　床に入り眠りに落ちればいつも、脚光を浴び喝采の元舞台に立つ己の姿の夢を見ます。その眠りから覚めても、彼女はその夢を現実にせしめんと日々の稽古に励みました。

スポットが消え、中央に当たる。
我仁田、移動。

七歹　　しかし、その励みが報われることはありませんでした。所属していた劇団が悪かったのか。はたまた、ただ単に彼女の演技が拙いものだったのか。むしろ、その両方だったのか。とにかく、彼女が日の目を見ることはありませんでした。

我仁田、絶望する。

七歹　　そんな時、彼女のもとに現れた一筋の光。それが<自殺権>でした。

我仁田、何かに縋る。

七夕　彼女が自分の夢に見切りをつけてしまおうかというその時、政府によって<自殺権売買法>が施工されたのです。幸い彼女の祖父は資産家だったので、<自殺権>を手に入れること自体はさほど難しくはありませんでした。

ルイシ　おい。

七夕　なんですか？

ルイシ　その女の人って、なんで<自殺権>を欲しがったんだ？ 自分の夢をあきらめようって時に、<自殺権>が希望になるとは思わないんだが。

七夕　いい質問ですね。ここからのお話がその質問の答えになるでしょう。彼女は、何も悲観を拗（こじ）らせて<自殺権>を使おうとしたわけではありません。彼女はあろうことか<自殺権>を舞台演出として使ったのです。

ルイシ　舞台演出？

七夕　そう、舞台演出。彼女は<自殺権>を使い、舞台上で役として死のうとしたのです。たしか・・・「ロミオとジュリエット」でしたかね。ジュリエットを演じる彼女は、そのラストシーンで自らの喉を突いてジュリエット諸共死のうとしました。

ルイシ　そんなもの誰が見たがるんだ。

七夕　誰もが、です。怖いもの見たさなのか、その舞台には物見遊山目的で数多くの客が訪れ、彼女はたいそう喜びました。

我仁田、客席の方を見て心底うれしそうな顔をする。

七夕　彼女を射竦（いすく）めんとする数多くの期待を帯びた双眸（そうぼう）。足元を照らす彼女だけの脚光。人間の最期を彩る一挙手一投足をその記憶に閉じ込めようとする客たちの面持。

我仁田、嬉しさを噛み殺したような顔をしながら「ロミオとジュリエット」を演じる。

七夕　それら全てによって、彼女が培った全ての技術と犠牲にした努力は報われたのです。彼女はその時、初めて本当の意味での『主役』となりました。

我仁田、膝立ちで短剣を喉元に掲げるジェスチャーをする。

七夕　最後の自害のシーンでは呼気の音すら掻き消える静けさだったと聞きます。喉を割いて彼岸の花の様に吹き出したその鮮血は全ての照明効果をマッチのそれ

と見紛うほどに置き去りにし、血液の投身によって生まれた水音は、数多の音響効果を騒音として唾棄してしまうほどであったとも。彼女の命をも投げ出した――――いや、それすら「糧」とした演技に、劇場のすべての人間が完全に飲まれてしまったのでしょう。

我仁田、頤(おとがい)を照明に捧げ、手は項垂れている。
全身は脱力し、痙攣しているが、膝立ちのままその体勢を保っている。
痙攣がだんだんと小さくなり、終には完全に止まってしまう。
すると、糸が切れたように倒れる。
明かりがつく。

ルイシ　……後悔しただろうな。
匕歹　おや、それは何故？
ルイシ　何故って……　そりゃあ報われたばっかりだってのに死にたくはないだろ。
匕歹　そうとは限りませんよ。人間は「満たされることは無い」と知ったその瞬間に死を選ぶ生き物ですから。
ルイシ　いや、その女優さんは最期の最期に報われたんだろ？「満たされることは無い」とは程遠いじゃねえかよ。
匕歹　「満たされることは無い」とは別に「がらんどうで空虚」な状態だけをさす言葉ではありませんよ。「完璧に満ち足りた」状態。それもある意味「満たされることは無い」状態なんです。人はやり切れないときに死を選び、やり切った時にも死を選ぶ生き物ですから。
ルイシ　八方塞がりだな。
匕歹　塞いでるのは人間自身ですけどね。
ルイシ　違いない。……ところで――――
匕歹　…奇遇ですね、私も少し気になる事が。

ルイシと匕歹、倒れている我仁田に目を落とす。

ルイシ　誰だお前！？
匕歹　誰ですか貴方？
　やっぱりルイシ君も気付いてましたか。
ルイシ　いや、気付くも何も、匕歹さんが話始めた辺りで堂々とドアから入ってきてただろ。

我仁田、キレよく跳ね起き、ドアの方にバックする。そして一礼。

我仁田　どうも、初めまして。
ルイシ　挨拶のタイミングおかしいよ！ なに人ん家に勝手に上がって寸劇始めてんだよ！
我仁田　いやはや、本当はお声掛けして入ろうと思ったんですけど、、聞こえてきた話の内容に我慢できませんで……。ああ、僕、我仁田 リシと申します。しがない物書きをやっておりまして、仕事柄物語に目がないんです。
ルイシ　誰だよ。
七夕　ああ、あの有名な！
ルイシ　知ってんのか？
我仁田　ああ、七夕さんというんですか。これはどうも。
七夕　ああ、これはこれはご丁寧に。私、国家特務生命部門通達課所属実働係の七夕 申示と申します。(ルイシに向かって) むしろ知らないんですか？ かなり有名な御仁ですよ。数々の賞を総なめにし、幾つものメディア化作品を手掛ける稀代の天才。写実主義の体現者。我仁田 リシ先生。その人です。
我仁田　よくご存じで。(少し照れる)
ルイシ　なんで知ってんだよ。
七夕　知らない人の方が少数ですよ。
ルイシ　小説は読まないんだよ。
我仁田　読まない人に読んでもらってこその著名の作家というもの、僕もまだまだということですね。
七夕　さすが、我仁田先生。含蓄あるお言葉だ。
我仁田　へへ。有難うございます。
七夕　おおっと。これは気付きませんでした。申し訳ありません。先生のような御高名なお方を、よもや立ちっぱなしのままお話しさせるなんて。ええっと、どこか座る場所、座る場所。
七夕　布団は……駄目だ臭い。
ルイシ　おい！
七夕　カメムシの限界集落みたいな臭いがする。
ルイシ　おい！！ 何がカメムシの限界集落だ！ お前俺の布団嗅いでないだろ！ 匂ってみろよ！ ほら！ ほら！ てめえ無視してんじゃねえよ！おいk――――

ルイシ、布団を突き出して抗議する。
七夕、無視して探す。
勉強椅子を見る。

七夕　この椅子は？　駄目だ安っぽすぎる。こんなところに我仁田先生を座らせてはいけない。品性が膝から崩れ落ちる。
ルイシ　おい！
七夕　ですが、このクッションは中々御立派。……よし！
ルイシ　お前今、遠回しに俺の人間性を否定したな！　椅子の安さと品性は関係ないだろ！

七夕、無視し椅子の上のクッションを床に置く。

七夕　ささ、こちらへ。
我仁田　お手数かけます。
ルイシ　勝手に座んな！　クッション戻せ！
七夕　まあまあ。そう躍起にならず。とりあえず何しにやってきたのかくらいは聞かないといけないでしょ？

ルイシ、不服そうにベッドの上に座る。

七夕　まず、どうしてあんな寸劇を？　先生は小説家なのですから、話を聞くだけで、態々演じる必要もなかったのでは？
我仁田　なにを頓珍漢なことを！　小説家なのだからこそ、物語りを追体験するための寸劇が必要なのです！　経験もなしに小説など書けません。
ルイシ　うるさっ。
七夕　なるほど。それはごもっとも。それでは次に、どうやって入ってきたんですか？　鍵は閉まっていたと記憶していますが。
ルイシ　先にそっち聞けよ。
我仁田　あれ？　普通に開いてましたよ？
ルイシ　開いてたんじゃねえか。
七夕　……これは不思議。
ルイシ　おい。
七夕　まあそれは置いといて。
ルイシ　置いとくな。
七夕　置いといて、最後に、何を目的にこんなあばら家に？
ルイシ　おい！
我仁田　いえ、実はですね、そこのルイシ君にチョットしたお願いがありまして。
ルイシ　俺？　取り立てて特別な経験はしてねえぞ。
我仁田　なにをおっしゃいますか。ルイシ君。ついさっきいっとう特別な経験をしたば

かりではないですか。ね、匕歹さん。
七歹　ああ、そういうことですか。しかし、どこでその情報を？　一般への発表はまだのはずですが。
我仁田　小説家には小説家の情報網がありまして。
ルイシ　ちょっとまて、勝手に話を進めるな。
七歹　ルイシ君が今日貰ったものですよ。
我仁田　匕歹さんから何か貰ったでしょ。
ルイシ　ええっと……ああ、<自殺権>か！
七歹　それです。
ルイシ　<自殺権>を貰った俺に取材をしたいってことか？
七歹　ええ。
我仁田　いえ、違います。
ルイシ　え？
七歹　え？
七歹　違うんですか？
我仁田　確かに<自殺権>関係ではありますが、取材目的ではありません。
ルイシ　じゃあ何を。

我仁田、覚悟を決めたように座布団から降り、佇まいを直して勢いよく土下座する。

ルイシ　ちょちょ、急にどうしたんだよ。
我仁田　どうか僕に<自殺権>を譲っては頂けないでしょうか！
ルイシ　はあ！？
七歹　どうか顔を上げてください。とりあえず理由を教えていただけますか？
我仁田　はい。…さっき匕歹さんに説明していただいたように、僕は物書きを生業としておりまして、そこそこヒット作やメディア化作品を出させていただいてます。存じております。
七歹　それで一年ほど前から、僕の生涯で最高傑作になるであろう作品を執筆し始めまして。
我仁田　ほうほう、文豪我仁田 リシの生涯最高傑作ですか！　完成させれば相当面白いものになりそうですね。
七歹　そうそれです！　書き上げさえすれば、完成させさえすれば、最高傑作になるのは確実なんです！しかしその予感とともに書き始めたはいいものの、ラストシーンが書けないのです！
我仁田　どんなシーンなんだ？
ルイシ　自殺するシーンです。さっきも言った通り、経験もなしに小説は絶対書けませ

ん！ 私は自殺を体験しないといけないのです！ ですので、ルイシ君の<自殺権>を是非とも譲っていただきたい！

我仁田、言いながらルイシに詰め寄ってもう一度土下座

ルイシ、我仁田の勢いにたじろぐ。

ルイシ　じ、自殺した後でどうやって小説を書くつもりなんだよ。

我仁田　死因をかなりゆっくりな安楽死にすればいけます。

ルイシ　あー・・・。そ、そもそも<自殺権>は人に譲れないだろ。

匕歹　できますよ。禁止されているのは<自殺権>の売買のみですので、譲渡する分には構いません。ああ、ですが、譲っても死因の選択権はルイシ君から移動しませんので、お気をつけて。

我仁田、匕歹の話を聞いてさらにルイシに詰め寄る。

ルイシ　さっきみたいに演じればいだろ！

我仁田　普段書くようなお話であればそれでいいんです。でも僕が今書いているのは最高傑作。生半端な経験ではだめなのです！ お願いします！

ルイシ　近いそしてうるさい！

ルイシ、我仁田から布団の上で距離をとる。

ルイシ　俺自身も貰うかどうかまだ決めてないんだ！

我仁田　もし貰わないとなったら是非僕に！

ルイシ　わかった。わかったから！

我仁田　今「わかった」と言いましたね？！ 言質とりましたからね！？

ルイシ　わかたって！ 一回落ち着けよ！

匕歹　凄い勢いですね。まさに執念。

我仁田　いやー。良かった良かった。話の通じる人で。

ルイシ　最悪だ。話が通じねえ・・・。

匕歹　創作家は得てしてどこかがおかしいものですからね。

我仁田、立ち上がり部屋から出て行こうとする。

我仁田　それでは、僕はこれで。

ルイシ　え、もう帰るの？
我仁田　要件は済みましたんで。
ルイシ　だからって、なんか、こう・・・あるだろ・・・。
我仁田　ありません。

ルイシ、我仁田がドアに向かっていくのを見て、少し嘆息しながら疲れた顔をする。

ルイシ　態々貰いに来なくても、勝手に自殺すればいいのに。
七夕　<自殺権>無しに自殺するのは犯罪ですよ。ご家族に賠償金が科せられます。迷惑を掛けてはいけません。
ルイシ　解って――――知ってるよ。なんとなく行ってみただけだ。
七夕　なんで言い直したんですか？
ルイシ　なんとなくだよ。

我仁田、ドアノブに手をかけ、会釈をしながらドアを開ける。
ドアを開けるとそこには暗い顔をした差辻 タイシが。
ルイシ・七夕気づいて引いてる。
我仁田だけ、ルイシ達の方を見ているので差辻に気付いてない

七夕　知り合いですか？
ルイシ　いや・・・初めて見た。
七夕　我仁田先生の知り合いでしょうか。
ルイシ　そうだったらいいな・・・・・。
七夕　あの・・・我仁田先生？
我仁田　なんですか？ 七夕さん。

七夕、差辻を指さす。
我仁田、自分を指さし首を傾げる。

七夕　誰ですか？
我仁田　え～、さっきも自己紹介したでしょ？僕のなｍ――――
差辻　初めまして・・・。
我仁田　うわぁ！！？

我仁田、ビビってめちゃくちゃ仰（の）け反って大きく後ずさる。
差辻、部屋に入ってドアをそっと閉じる。

我仁田　・・・・・誰？
差辻　初めまして・・・。差辻 タイシ・・・と、もう・・・します。
ルイシ　暗っ・・・。
匕歹　どうも、私、国家特務生命部門通達課所属実働係の匕歹 申示と申します。以後、お見知り置きを。

匕歹、数歩前に出て差辻に握手を求める。
我仁田、匕歹の陰に隠れて肩口から差辻を覗いている。
差辻、弱々しく握手に応じる。

差辻　よろしく・・・お願いします。
匕歹　ほら、ルイシ君も。

匕歹、ルイシにも握手を促す。
ルイシ、おたおたしながら差辻と握手をする。

ルイシ　ああ、これはどうも。――――やねえ！！

差辻、ルイシの声に驚いて身を竦（すく）ませる。

ルイシ　今日で三人目だぞ！？ 不法侵入！！ 馬鹿か！？ 馬鹿ばっかなのか！？
匕歹　ルイシ君。もうちょっと声を抑えて。差辻君が委縮しちゃってますよ。
ルイシ　知らねえよ！ 公務員と小説家ときて次はなんだ！？ ジャーナリストか、活動家か！？ 奇を衒（てら）って宗教家とかか！？
差辻　してません・・・・・・。無職で・・・・・・す。
匕歹　そのパターンでしたか。
差辻　あの・・・・・。
ルイシ　なんだ。
差辻　自分・・・・・・その・・・・・・隣に住んで、部屋で読書してたら・・・余りにもうるさくて・・・・・。注意しようと思って・・・・・・そしたら・・・鍵があいてて・・・・・・。
我仁田　すっと喋れよ！ もどかしい。
匕歹　だ、そうですよ。

ルイシ、ばつが悪そうな顔。

ルイシ　それは、・・・・・なんかすみません。
差辻　いえいえ・・・・・・お気になさらず・・・自分が神経質なだけだと・・・・・・思いますから。
ルイシ　そうは言ってもご迷惑をおかけしたのはこちら側なんですから・・・・・・
我仁田　こちら側って、絶対に僕らも入ってますよね。
匕歹　一番うるさかったのはルイシ君だと思うんですけどねえ。
ルイシ　そこ！うるせえ！
差辻　あの・・・・・・。
ルイシ　どうしました？
差辻　部屋の・・・・・・外にいるときに聞こえて・・・・・・きたんですけど。
ルイシ　はいはい。
差辻　それで・・・あの・・・<自殺権>って単語が・・・・・・聞こえてきまして。
ルイシ　あちゃー、聞こえちゃってたかー。
匕歹　まあ、基本それについてしか話してませんからね。

差辻、覚悟を決めたように座布団から降り、佇まいを直して勢いよく土下座する。

ルイシ　なんだよ！
匕歹　さっきもこんなの見ましたね。
差辻　壱岐さんが、こっちに迷惑をかけた・・・・・お詫び・・・・・・なんて言ったら・・・おかしいかもしれませんけど・・・・・・
我仁田　結局なにが言いたいんだよ！
差辻　あの・・・<自殺権>を、いただけない・・・・・・かな・・・・・・と。
ルイシ　やっぱりそこに行きつくのか・・・・・・。
匕歹　案の定ですね。
我仁田　だめだ！

我仁田、匕歹を押しのけて差辻の正面に立つ。

我仁田　<自殺権>はもう僕が貰ったんだ！
ルイシ　いや、まだあげてないけどな。
我仁田　差辻君。残念ながら君に<自殺権>のお鉢は回ってこないよ。
ルイシ　お前にもまだ回ってきてないけどな。
差辻　それは・・・困ります・・・必要なんです・・・。
我仁田　君が必要かどうかなんて関係ないよ。大体、何が目的で<自殺権>を欲しがるん

だ。
差辻　それは・・・・・。
我仁田　口籠るってことは、やましいことでもあるのかい？
ルイシ　普通は自殺したい理由なんて言えないだろうに。
七歹　そこはほら、我仁田先生は普通じゃありませんから。
我仁田　理由を言えないならやれないな。
ルイシ　なんでお前が試す側なんだよ。

差辻、しばし悩んで、意を決したような顔をする。

差辻　い・・言いたいんですけど。言えないんです・・・。
我仁田　ほら、やっぱり言えないような理由なんじゃな――――
差辻　違います！！
我仁田　な、なんだよ。急に大きな声を出すなよ。
ルイシ　ず、ずいぶんと大きな声・・・。
七歹　えらく必死ですね。
差辻　あっ・・・すみません・・・。

七歹、我仁田と差辻の間に割って入る。

七歹　まあまあまあまあ。お二人とも落ち着いて。先生もそんなにせっついて語気を荒げずにゆっくりと差辻君のお話を聞きましょう。差辻君、説明してもらってもいいでしょうか。なぜ^自殺権V を譲ってほしいのでしょうか。
差辻　それは・・・言えません。
我仁田　ほら！
七歹　我仁田さん。（差辻に向かって）それは何故？
差辻　自分には・・・ないん・・・です。
我仁田　はっ！！　夢も希望もないってか！　ありふれた理由だ――――

ルイシ、我仁田の後ろに回って口を塞ぎ後ろに下がらせてから、七歹に話すようにを促す。

ルイシ　続きをどうぞ。
七歹　無いとは、何が？
差辻　死ぬ理由が・・・です。理由がないから・・・、言おうにも・・・言えないんです。
七歹　それは、どういうことでしょうか。

差辻　そのままの・・・意味です。自分は・・・理由もなく・・・、なんとなく・・・、自殺したいんです。

匕歹　それは、なんというか・・・

我仁田、ルイシの手を振り解き身を乗り出す。

我仁田　おかしいよ！ 差辻君！ 人が自ら死ぬときは何か理由があるはずだ！

差辻　殆ど、欲求みたいなもの・・・なんです。食欲とか、性欲とか、睡眠欲みたいに・・・、自殺欲・・・のようなものがあるんです。

匕歹　その欲を満たすために、<自殺権>が欲しいと。

差辻　はい・・・。

我仁田　解らない。生きたいのが人間じゃないのか。生き物じゃないのか。

ルイシ　お前だって、死にたがりだろ。

我仁田　僕は別に生きたくないわけじゃありません。生きることより成したいことがあるだけです。（差辻に向かって）君、君の言いたいことは大体分かった。理解できなかったししたくもないけれど、納得はできた。でも、その上で言わせてもらう！ 君に<自殺権>は譲れない！！

ルイシ　だから、お前にもまだ譲ってないって。

我仁田、気にせず話し続ける。

我仁田　君は、<自殺権>をその欲を満たすのに使うつもりだろう？ そんな奴に<自殺権>は渡せないよ。

差辻　それは・・・困ります。（ルイシの方を向いて）自分はもう・・・駄目なんです。小さなころから・・・ずっとこの欲は消えなくて・・・、そのせいで・・・何にも興味を持てなくて・・・勉強もうまくいかなくて・・・。

差辻、じわじわとルイシににじりよって行く。

差辻　いつの間にか・・・家から出なくなってて・・・ずっと本ばかり読んでて・・・家族にいっぱい迷惑をかけて・・・自殺しちゃ・・・駄目だから・・・死のうにも・・・死ねなくて。せめて抑えようと思って・・・こうやって生傷ばっかり・・・増えて――――

差辻、袖を捲って手首の傷をルイシに見せる。

ルイシ、仰け反る。

ルイシ　わかった！ 言いたいことはわかったから、離れろ！

ルイシ、差辻を押し返し肩で息をしながら、我仁田と差辻に向き合う。

ルイシ　お前ら二人の言い分はよく分かった！ その上でもう一度言う！　まだ、俺が<自殺権>を誰かにやるとは決まってない！

差辻　え、そうなんですか？

ルイシ　そうだよ。

差辻　じゃあ、この人は・・・？

ルイシ　ただ貰った気になってるだけだ。馬鹿だ。

我仁田　殆ど決まりみたいなものです。馬鹿じゃないです。

匕歹　そもそもルイシ君は<自殺権>の受け取り自体を保留にしています。今ここで誰に譲るかでもめるのは些（いささ）か無駄なように思えますよ。

ルイシ　匕歹さんの言う通り。どんだけ皮を計算しようとタヌキはまだ狩ってないんだ。今日はもう帰れ。匕歹さんはまだ聞きたいことがあるから部屋に残っててくれ。

ルイシ、二人の背中を乱暴に押しながら部屋から出る。

匕歹、部屋に一人残って机の辺りをまさぐる。茶封筒を見つけ、椅子に座り茶封筒の中身の紙束を見る。

匕歹　おや、これは・・・。なかなかどうして・・・。彼も彼でいろいろと歪んでいる。

ルイミ、入ってきて匕歹を静かに睨む。

匕歹、ルイミに気付き底意地の悪い笑みを浮かべる。

匕歹　おや、やはりおられましたか。ルイミさん。

ルイミ　気づいてたのね。

匕歹　私が来た時には閉まってたドアが我仁田先生がが来る頃にはなぜか開いてましたからね。おおかた、途中で引き返して手頃な所に隠れていたというところでしょう。

ルイミ　そうよ。やっぱりどうしても納得できなくて戻ってきたの。

匕歹　そんなにルイシ君が<自殺権>を貰うことが嫌ですか。

ルイミ　当たり前でしょ。

匕歹　解せませんね。なぜそこまで<自殺権>を忌み嫌うのですか。

ルイミ　私は好き好むやつの方が理解できないわ。

匕歹　世間一般ではそちらの方が一般的ですよ。

ルイミ　私は少数派なの。それもかなり意志の固い。
七夕　固いのは頭だと思いますけどね。もっと柔軟に考えた方がいいと思いますよ。
ルイミ　それは柔軟なんじゃなくて軟弱って言うのよ。
七夕　・・・平行線ですね。
ルイミ　そりゃそうよ。
七夕　まあ、そちらの諸々のご事情を鑑みれば、そう考えるのも納得できなくはないですけどね。
ルイミ　知ってるの？
七夕　そりゃあ、相当のものを差し上げるわけですから、事前にある程度の下調べはしますよ。バックグラウンド然り、家族構成然り。
ルイミ　下調べをした上で、うちを選んだの？
七夕　選ばれたうえで下調べをしたのです。人を選ぶのはあくまでも籤ですから。
ルイミ　そういうこと言いたいんじゃない！ あんたは、うちの状況を知ってて<自殺権>を持ってきたの！？ 私のお母さんの病気のことも！ お父さんが自殺したことも？
七夕　・・・知っていましたとも。貴女のお母様とルイシ君のお父様が再婚したことも。それ故貴方とルイシ君は血の繋がっていない兄妹だと言うことも。
ルイミ　馬鹿にしてるでしょ・・・。
七夕　まさか、私たち公務員は国民の血税でおまんまを食わせていただいているのですよ。感謝こそすれど、馬鹿になど――――
ルイミ　黙れ！！
七夕　おお怖い。
ルイミ　もういい！！ ルイシの代わりに私が答える！ <自殺権>なんて要らない！！
七夕　それは受けられませんね。<自殺権>が当たったのはルイシ君ですから。必要不必要を決められるのもルイシ君だけです。
ルイミ　じゃあせめてこの家から出てって！
七夕　ルイシ君が外に行ってしまいましたからね。挨拶もせずに帰れませんよ。
ルイミ　ペラペラペラペラと口が回る・・・。
七夕　通達係ですからね。弁は立ちますよ。――――おや？ ほらほら、そんなに青筋を立てないで。ほらここに面白い読み物がありますよ。

七夕、茶封筒の中の紙束だけをルイミに渡し、茶封筒は後ろ手に隠す。
ルイミ、最初は不機嫌な顔をしながら紙束の内容に滑らせるように目を通すが、ページが進む度に顔に真剣味が差してくる。

七夕　この茶封筒に入ってました。

七夕、持ってた封筒を見せる。

ルイミ　今朝の・・・。

ルイミ、もう一度真剣な顔つきに戻る。

七夕　どうですか？ 面白いでしょ？

【壱岐家の前】

ルイシ、我仁田・差辻の背を押しながら出てくる。
我仁田と差辻、痛そうな顔。

我仁田　痛い痛い！ もうちょっと優しくしてくださいよ！
ルイシ　うるせえな。

ルイシ、背中を押しながら中心まで連れて行き手を放す。
我仁田、手が離れてもまだ痛がってる。

我仁田　痛い痛い！
ルイシ　もう押してねえよ。（我仁田の頭を叩く）
我仁田　いて！
ルイシ　とにかく今日はもう帰ってくれ、
我仁田　解りましたよ。もし要らないと思っても絶対に返さないでくださいね！ ちゃんと僕にくださいね！
ルイシ　そうなったらな

我仁田、頭を押さえながら帰っていく。
差辻、ルイシの横で手を振る。

ルイシ　いや、お前も帰れよ。

ルイシ、差辻の背中を我仁田の帰った方に向かって押す。
差辻、数歩進んで止まった後、気まずそうに苦笑いしながら逆方向に進む。

差辻　自分・・・こっちなんで。

ルイシ、差辻見送ってから疲れた顔で家に戻ろうとする。

ルイシ　なんなんだ今日は・・・。

携帯の着信音が鳴る。
ルイシ、ポケットから携帯電話を取り出し、しばらく着信画面を微妙な顔をして見つめ

てから通話ボタンを押す。

ルイシ　もしもし。いや、大丈夫だよ。うん、うん。そんなことないって。ちゃんと食べてるよ。ルイミは今日から学校なんだ。うんうん、大丈夫。ちゃんとまじめに通うと思うよ。……どうしたの？ ああ…そっちにも行ったんだ…。うん。そうなんだ。こっちにも来たよ。すごい確率だよね。運がいいのか悪いのか。世間的にはいいんだろうけどね。僕はどうしてもいいとは思えないんだ。死んでしまえって言われてるみたいで。……いや、大丈夫だよ。死にたい理由なんてないんだから。お父さんのことも漸く気持ちの整理がついてきたんだ。うん、うん。…はは、わかってるよ。うん、じゃあね。レイナさん。

ルイシ、携帯を切り、浅く溜息をつく。

ルイシ　…よしっ。

ルイシ、家の中に戻る。

【ルイシの部屋】

ルイミが真剣な顔をして、紙束を読んでいる。
匕歹はクマのぬいぐるみで手遊びをしている。
暫くしてルイシが部屋に戻ってくる。
ルイシ、ルイミに気付く。

ルイシ　え。なんでルイミが。
匕歹　気になって途中で帰ってきちゃってたみたいですよ。
ルイシ　ルイミ・・・お前学校はどうしたんだよ。
ルイミ　ねえ、ルイシ。これ、どういうこと・・・？

ルイシ、ルイミの手元に目を落として、ルイミが何を見ていたのかを気付く。

ルイシ　お前！ 何見てんだよ！！

ルイシ、慌ててルイミの手から紙束を取り上げる。

ルイミ　なんでそんなこと調べてるの？
ルイシ　別に。興味があっただけだよ。
ルイミ　ねえルイシ、なんで。
ルイシ　だから、なんとなく調べただけだって――――
ルイミ　嘘つかないで！！ 今迷ってるのも、そういうことなの？
ルイシ　・・・。

匕歹、流れを切って空気を読まず飄々（ひょうひょう）と話し始める。

匕歹　インターネットでは検閲が入りますから古本屋とかで調べたんですかね。

匕歹、ルイシの机の上にある本立ての中から推理小説を見つけて手に取る。

匕歹　おっとまさかの一昔前の推理小説ですか。盲点ですね。
ルイシ　うるさい・・・。
匕歹　確かに、『自殺とバレない自殺の仕方』を調べるのに、これ程おあつらえ向きなものはない。

ルイシ　黙れ。
七歹　でも気を付けないと駄目ですよ。あんまりクラシックな方法ですと、現代の科学力で容易に見破られてしまいます。
前例もありますし。

七歹、段々とわざとらしく詰る(なじる)様な話し方になっていく。

ルイシ　黙れって。
七歹　目的は、保険金とかですかね。あー・・・そういえば、お母様――――レイナ様でしたっけ？――――が重い病気だったはず。治療費も馬鹿にならないでしょう。
確か保険は――――

七歹、どこからかバインダーを持ってくる。

七歹　――――やはり、死亡保険に入ってますね。それも結構高額の。あらら、お父様も同じ保険だ。お二人とも仲がいい。きっと性格も似てらっしゃったんでしょうね。性格も、死ぬ理由も――――
ルイシ　黙れって言ってるだろ！！！
・・・・・自分で言う。
七歹　これはこれはすみません。おロチャック。

ルイミ、ルイシと向き合う。

ルイミ　なんでよ。
ルイシ　父さんのためだよ。
ルイミ　どういうこと？
ルイシ　父さんがしたかったことを俺がやるんだ。
ルイミ　したかったこと・・・？
ルイシ　家族を守ること――――レイナさんを死なせないことだよ。
ルイミ　それが、なんで自殺をすることになるの？
ルイシ　ルイミも知ってるだろ。レイナさんの延命治療にはかなりの金がかかる。保険金が必要なんだ。
ルイミ　お母さんに、ルイシを犠牲にして生きろっていうの。ずっと後悔しながら生きろってい――――
ルイシ　ずっと後悔してでも生きてて欲しいんだよ。欲しかったんだよ。俺も父さんも。
でも、それももう無理だ。父さんは失敗しちまったし。七歹さんにはバレちま

ったし。

ルイシ、諦めたような顔をする。
七歹、手で会話を制して口の前でチャックを開ける仕草をする。

七歹　私は言いませんよ。
ルイシ　え？
七歹　そこらへんは私たちの管轄ではありませんし。
ルイシ　じゃあ――――
七歹　そもそも、<自殺権>を使えば『自殺とバレない自殺』も可能ですよ。
ルイシ　それなら、保険のお金も――――
七歹　貰えます。良かったですねお母様は助かりますよ。
ルイミ　勝手に話を進めるな！

ルイミ、ルイシと七歹の間に割って入り、ルイシと向き合う。

ルイミ　ねえ、なんでもう決めてるの？ 決まってるの？ 死ぬんだよ、死んじゃうんだよ？
ルイシ　それでもレイナさんは生きれるだろ。お前の家族が助かるんだからいいじゃな
ルイミ　あんたも家族でしょうが！
ルイシ　・・・。
ルイミ　あんたはずっとそうだった！！ 一緒に住み始めてからの一年間、どこか距離があって、気を使ってて、ずっとよそよそしかったじゃない！！ あんただけは、私たちを――――私とお母さんを家族として見てなかったじゃない！！ あんたも、ルイシも家族なの！ いなくなっちゃダメなの！！
ルイシ　じゃあ、一体どうしろって言うんだよ！！ ほっとけって言うのかよ！？ 見なかったふりして見殺せって言うの――――
ルイミ　私にルイシを、家族を見殺せって言うの！？
ルイシ　それは――！

ルイシとルイミ睨み合う。

ルイシ　・・・そう言ってるんだよ。自分の母親のために、義理の兄くらい見殺しにしろって言って――――

ルイミ、ルイシの言葉をビンタで制し、睨む。

ルイシ、眼をそらす。
ルイミ、部屋を出て行く。
ルイシ、それを目で追い、出て行って暫くしてから顔を俯かせる。

七歹　危なかったですね。もう少しで言いきっちゃうところでした。
ルイシ　……。

暗転

【過去】

全体的に薄暗く、顔ははっきりと分からない。
中央スポット。そこにルイシが立っている。
父さんの再婚の前日譚。

ルイシ　父さん。なんだよ再婚って・・・。何も言ってなかったじゃないか。
父さん　・・・すまない。中々言い出せなくて。
ルイシ　母さんのことはもうどうでもいいのかよ！
父さん　違う。そう言うことじ――――
ルイシ　そういうことだろ！ 母さんのことがどうでもいいから、好きじゃないから再婚なんてできるんだろ！！
父さん　話をきいて――――
ルイシ　聞きたくない！！
父さん　ルイシ
ルイシ　・・・もういいよ！ 出て行ってくれよ・・・。

ルイシ、中央奥ベッドの上に移動し面見背を向けて寝る。
レイナ、扉に向かって語り掛けている。
初めてあった日。

ルイシ　・・・
レイナ　ルイシ君。
ルイシ　・・・
レイナ　聞いたわ。あの人、貴方に何も言ってなかったんでしょ？
ルイシ　・・・
レイナ　ごめんなさい。ルイシ君。驚いちゃったよね
ルイシ　・・・。
レイナ　ごめんね。
ルイシ　・・・。
レイナ　貴方のお母さんのこと、聴いたわ。
ルイシ　・・・すみません。レイナさん。もう、いいです。
レイナ　・・・夜ご飯。作ってあるから。

ルイシ、徐に起き上り下手面にゆっくりと移動。
上手スポットには黒子の二人が立っている。

（母さんの声を差辻と我仁田が交互に行う。）
母さんがいなくなるまで。
十年前。

ルイシ　かあさん。どうしたの？
母さん　ルイシ。お母さん、出て行くのよ。
ルイシ　え、なんで？
母さん　ルイシ、お母さん、出て行くのよ。
ルイシ　父さんと喧嘩したの？　僕が話してあげるよ。仲な――
母さん　ルイシ、お母さん、出て行くのよ。
ルイシ　あんまり意地張らないでさ。
母さん　ルイシ、お母さん、出て行くのよ。
ルイシ　・・・ほんとに出て行くの？
母さん　ルイシ、お母さん、出て行くのよ。
ルイシ　ちょっと待ってよ！！
母さん　ルイシ、お母さん、出て行くのよ。
ルイシ　だから！　話を聞いてよ！　かあさ――
母さん　ルイシ、お母さん、出て行くのよ。
ルイシ　待ってよ！　待って！　母さん！　母さん！・・・・・・母さん。

ルイシ、本棚の前に移動。
レイナさんが来てから半年たって。
ルイシ、アルバムを手に取って読んでいる。
ドアを開ける音。

レイナ　何読んでたの？
ルイシ　・・・別に何でもないです。
レイナ　・・・
ルイシ　・・・アルバムです。
レイナ　アルバム？　アルバムならあの人の部屋に――
ルイシ　母さんが写ってる写真だけを集めたアルバムです。
レイナ　・・・なんで？　なんでそれだけ分けておいてあるの？
ルイシ　・・・・・・。
レイナ　ルイシくん？
ルイシ　父さんが。捨てようとしてたんです。

レイナ　…。
ルイシ　…知ってますか？　母さんが出て行った理由。
レイナ　…。
ルイシ　男を作って出て行ったみたいですよ。
レイナ　あの人から、聞いたわ。
ルイシ　不倫して、貢いで、借金して、駆け落ちして…。良くある話ですね。
レイナ　…。
ルイシ　まるでドラマみたいですね。
レイナ　でも、ルイシ君はお母さんのこと…。
ルイシ　はい。待ってますよ。ずっと。
レイナ　なんで？　だってルイシ君のお母さんは――――
ルイシ　違ったんです？
レイナ　…え？
ルイシ　僕が知ってる母さんと、全然違ったんです。一緒にスーパーに行った時と、僕を叱ってる時と――――父さんといるときと。
レイナ　…
ルイシ　母さんが出て行くとき、最後にあったの僕なんですよ？　なのに、その時の母さんの顔が思いだせないんです。「ルイシ、お母さん、出て行くのよ」。辛うじて覚えてた言葉はこれだけ。あとはどんだけ頑張っても顔は真っ黒で、仕草はちぐはぐで、まるで母さんじゃないみたいで…。
レイナ　…
ルイシ　だから、僕の中ではあの時の母さんは母さんじゃないんです。母さんだってことは知っていても、どうしても解らないんです。納得、できないんです。
レイナ　ルイシ君…
ルイシ　本当は父さんにも、レイナさんにも――ルイミにだって悪いと思ってるんですよ？　僕のちっぽけな意地のせいでギスギスさせちゃって。
レイナ　…
ルイシ　レイナさん、僕の前では父さんのこと「あの人」って呼ぶでしょ？
レイナ　…

ルイシ、ドアの前に移動。
ドアを開けてルイミが入ってくる
レイナが不治の病に罹った日。

ルイシ　なんて言ってた？
ルイミ　こんなのへっちゃらだって。

ルイシ　はは、あの人らしい。
ルイミ　お父さんは？
ルイシ　なにも。でもなんか辛そうだった。
ルイミ　お母さん、どうなるのかな。（しゃがみ込む）
ルイシ　何とかする。
ルイミ　お金は？
ルイシ　…

電話の音

ルイシ　もしもし。
父さん　もしもし。
ルイシ　…なに？
父さん　いや、なんとなく、声が聞きたくなってな…
ルイシ　あぁ、そう…。
父さん　…なんか、久しぶりだな。こうやって話すのは。
ルイシ　そう、だね。
父さん　かあさ――レイナさんのことは、すまなかった。お前の気持ちも考えるべきだった。
ルイシ　どうしたの急に。
父さん　レイナさんのことがあってお前とは変な空気になってたからな。
ルイシ　…別にもう大丈夫だよ（少し笑って）。レイナさんがいい人だってことは、もう、なんとなくわかってるし。
父さん　……なあ。
ルイシ　どうしたの？
父さん　お前は、「母さん」のために命を懸けられるか？
ルイシ　…え？
父さん　いや、何でもないんだ…。…もう切るな。
ルイシ　…父さん。
父さん　ん？
ルイシ　「母さん」なら、家族なら。懸けられるよ。
父さん　ルイシ…
ルイシ　だから、レイナさんにも、きっと、いつか…

【ルイシの部屋／夜】

勉強机にスポットが当たる。
ルイシ、勉強机に座り頭を抱えて考え込んでいる。

【ルイミの部屋／夜】

ベッドにスポットが当たる。
ルイミ、布団の上で膝を抱えている。

【国家特務生命部門通達課資料室／夜】

舞台上手にスポットが当たる。
匕歹、電話を耳に挟み何か調べ物をしている。

【ルイシの部屋・ルイミの部屋・国家特務生命部門通達課所属実働係資料室】

三つのスポットが同時に点き、ゆっくりフェードアウト。

【ルイシの部屋／朝】

目覚まし時計の音がけたたましく響く。
ルイシが机の上で寝ている。
数コールほど音がなってもぞもぞと動くがすぐに止まる。
どうやら途中で寝てしまったようだ。
そこからまた数コールほど音がなる。
今度は目覚まし時計の前まで行き、手をかける――――と思いきや、クマの人形の頭を鷲掴みにしてベッドの上に倒れこんだ。
そこからまた数コール音が鳴る。
ルイシ、起きない。
鳴り響く目覚まし時計。
ルイシ、やっと布団から出る。もたもたと目覚まし時計を止める。
ルイシ、うつろうつろしながら、寝間着から着替えていく。
漸く着替え終わり、ドアの方に行くと思いきやベッドの前に立つ。

ルイシ、ベッドに倒れこむ。

我仁田　いや、起きてくださいよ！！

我仁田、勢いよくドアを開けて部屋に入り、ルイシの肩を掴んで揺らす。

我仁田　起きてくださいよ！！
ルイシ　なんだよ～。
我仁田　今日は<自殺権>を僕に譲る話をする約束でしょう！？
ルイシ　そんな話してねえよ～。
我仁田　やっぱり駄目か・・・。まあいいから起きてくださいよー。
ルイシ　わかった、わかったって～。

ルイシ、ベッドから弾みをつけて起き上がると前で体操を始める。

ルイシ　おいっちに～
我仁田　寝起き悪いんですね。
ルイシ　低血圧だから。
我仁田　低血圧ってあんま関係ないらしいですよ。

ルイシ　へぇ、さすが博識だな。
我仁田　小説家にとってこれぐらいは一般常識ですよ。
ルイシ　はあ～、すごい世界なんだな。
ルイシ　なあ。
我仁田　なんですか。
ルイシ　お前、なにしてんだ？
我仁田　やだなあ、ルイシ君を起こしに来てるに決まってるじゃないですか～。
ルイシ　そういうこっちゃねえんだよ。どうやって入ってきたんだ。
我仁田　普通に正面から入りましょ。
ルイシ　ルイミの奴・・・、鍵閉めずに行きやがったな・・・。
我仁田　いや、妹さんは居ましたよ。
ルイシ　あいつ学校行ってないのか・・・
我仁田　まあ、昨日あんだけ言い争った後ですからね。思うところもあるんでしょう。

停止。

ルイシ　誰から聞いた？
我仁田　え？・・・ああ、匕歹さんです。
ルイシ　やっぱあいつか・・・。

体操再開。

我仁田　昨日の夜。急に電話が来て。「いいネタがあります」ですって。差辻君にも伝えてたみたいですよ。
ルイシ　俺の個人情報はどうなってるんだよ・・・。
我仁田　どうなってるんでしょうね。ないんじゃないんですか？
ルイシ　最悪だ・・・
我仁田　おかげでこっちは助かってますけどね。なんで喧嘩したんですか？
ルイシ　・・・理由は聞いてないのか？
我仁田　はい、そこは何故か伏せられて。
ルイシ　・・・・・なあ。
我仁田　なんですか？
ルイシ　お前なんで今死にたいの？
我仁田　言ったじゃないですか。小説を書くためだって。
ルイシ　違う違う、なんで『今』なのかって話だよ。
我仁田　・・・どういうことですか？

ルイシ　だから、最高傑作が書きたいなら別に『今』じゃなくていいだろってこと。
我仁田　読者が待ってるんです。
ルイシ　読者が今待ってるのは最終作じゃなくて次作だろ。確かに最高傑作は求めてるだろうけど。
我仁田　・・・
ルイシ　どうした黙って。
我仁田　いえ、ちょっと・・・。

七歹　おーはようございます。
ルイシ　この声は、七歹さん！？

ルイシ、溜息をついて窓の方に行く。
七歹、窓から入ってこようとするが、ルイシが窓を閉めたので入れない。

七歹　あれ？ ちょっとー？ ルイシくーん？ 開けてくださーい。入れないですー？ここ上るの結構きついんですよー。ねえねえ、聞こえてますー？ おーい、おーい？
あ、 差辻さん！ フラフラしないで、あぶ、あぶない！ あぶ、危ない！

外から人が落ちる音が聞こえる。

我仁田　七歹さん！？ え！？ ルイシ君、大丈夫なんですか！？
ルイシ　大丈夫だろ、多分。
我仁田　多分って・・・。

チャイムを連続で鳴らす音、玄関のドアが開く音、階段を駆け上がる音。
七歹と差辻が勢いよくドアを開けて入ってくる。よく見ると服が少し汚れている。

七歹　殺す気ですか！ ――――って、我仁田先生、いらっしゃってたんですね。
我仁田　どうも・・・。
ルイシ　差辻も来てたんだな。
差辻　家で寝てたら・・・窓から入ってきたんです・・・。
ルイシ　お前よそでもその入り方してるのか。
七歹　サプライズです。
差辻　勘弁してください・・・。
我仁田　辟易してるじゃないですか。
七歹　やめてくれって言われてからが本番です。

ルイシ　一生練習で済ませとけ――――って、何で集まってんだよ！！

ルイシ以外、ぽかんとした顔。

七歹　なんでって・・・ねえ？

我仁田　特段これと言ってすることもありませんし。

ルイシ　家で大人しくしてろよ。

差辻　そうですね・・・。ですので、自分はこれで・・・。

七歹　駄目です。

差辻、帰ろうとするが七歹から杖の持ち手を後ろ襟へ引っ掛けて止める。

差辻　帰らせてくださいよ。

七歹　まあまあ、どうせ家に帰っても引き籠ることしかないんでしょう？

差辻　それは・・・・・そうですけど・・・。

七歹　ルイシ君も、せっかくみんなこうして集まったんです。どうせだったらお話ぐらいしましょうよ。

ルイシ　ふざけんな。俺には考えないといけないことがあるんだ。

七歹　どうせ一人でうだうだ悩んでいても答えなんて出ませんよ。だったらとりあえず気軽にお話でもしながら、一旦考えを整理しましょう。

七歹、言いながらルイシをベッドに座らせ、他の二人を床に座らせる。

差辻　話すのはいいとして・・・何を話すんですか・・・？

七歹　そうですね・・・このメンバーの共通点――――「自殺」について話しませんか？

我仁田　気軽にお話・・・にしては重い題材ですね・・・。

七歹　そんなわけないでしょう。自殺したいと思っている人間にとって、命がそこまで重いわけがない。

差辻　なかなか・・・刺さることを言いますね。

七歹　言葉はナイフですから。

我仁田　そういう意味ではないと思いますけど。それと、他の人はどうか分かりませんが、別に僕は自分の命が軽いと思っているから自殺したいわけじゃありません。命を重く受け止めた上で、重視した上で、それより大切なもののために投げ出したいのです。

ルイシ　俺だって同じだよ。命より大切なものがあるからって、命が大切じゃないわけじゃない。

差辻、俯いて考え込んでいる。

七夕　おっと、そうですか。すみません。少々邪推が過ぎたようで。あら、どうしたんですか差辻君。黙りこくって。

差辻　自分は・・・解りません。何の信念もなく・・・欲のために動いてる自分には。自分で自分の命をどう思っているのか・・・。重視しているのか・・・、軽視しているのか・・・。

我仁田　欲のために死のうとしているんだから、軽く見てるってことだろ。

七夕　そうとは限らないでしょう。我仁田先生だって、言い換えてしまえば自分の作品を完成させたいという欲から自殺しようとしているのですから。

ルイシ　それを言ったらなんにでも言えるだろ。

七夕　そうです。なんにでも言えるのです。なんにでも言えるからこそ、欲の有無は軽視重視には関係ないのです。

ルイシ　いままでの話を全否定だな、

七夕　軽い話ですから。

我仁田、手を打って視線を集める。

我仁田　そう言えば、皆さんはどんな死に方をしたいんですか。死ぬ理由ばかり聞いて、そっちの方は聞いてなかったので。

七夕　言われてみればそうですね。私もルイシくんのしか知りませんし。我仁田先生なんて小説のラストを飾るような死に方なんですから、さぞ劇的なんでしょう。

我仁田　いえいえ、そんなことないですよ。いたって普通の死に方です。

ルイシ　普通って言うと・・・首吊りとかか？

我仁田　おおさすが、正解です。首をゆっくりゆっくりと吊りながら、主人公と穏やかに死ぬのです。

ルイシ　オチが首吊りか、暗そうだな。

我仁田　そうでもないですよ。華々しい人生賛歌です。

ルイシ　へえ、なんか想像しづらいな。

我仁田　でしたら、是非！ 僕に<自殺権>を！ そうすれば一月二月で小説がお目にかかれますよ！

ルイシ　断る。

我仁田　それは残念。・・・・・死因と言えば、差辻君の方が気になりませんか？ 欲のために死にたい彼がどんな死に方を望んでいるのか。

我仁田、黙って話を聞いていた差辻の方を見る。
差辻、少しビクッとしてからおずおずと話し始める

差辻　じ、自分ですか・・・？　自分もそんなにおかしな死に方では・・・・・・ないですよ。ごく普通の・・・・・・ありふれた死に方です。
ルイシ　ありふれた――――水死とか？
差辻　違います・・・。水死は苦しそうなので・・・・・・。
ルイシ　あー。さすがに連続では当たらないか。それで？
差辻　安楽死・・・・・・です。
ルイシ　そりゃあ、なんとも・・・・・

ルイシ、微妙な顔をする。

我仁田　味気のない死に方だ。
ルイシ　おい。
差辻　味気ない・・・・・・ですよね。でも・・・・・・自分の欲を満たすような死に方は・・・・・・これしかないんです。痛みとか・・苦しみとか・・そういうのを無しにして・・・純粋に死んでることを・・愉しみながら死ねるような・・・・・・そんな死に方は。
ルイシ　確かに、首吊りとか水死じゃあ、しんどくってそれどころじゃないもんな。
差辻　はい・・・。そういうルイシさんは・・・どんな死に方をしたいんですか・・・？　七歩さんから・・・ルイシ君は貰う方に傾いていると聞きましたし・・・。
ルイシ　その話を聞いて、まだ俺から<自殺権>を貰うつもりなのか？
差辻　それでもまだ・・・悩んではいるとも聞きましたから・・・。
ルイシ　まあ、殆どそのつもりなんだけどな。・・・それで、俺の死に方だっけ？
差辻　はい。
ルイシ　それは――――
七歩　『自殺とバレない自殺』ですよね。
ルイシ　おい！
差辻　それはまた・・・なんというか・・・――――
我仁田　不思議な死に方、ですね。
ルイシ　・・・俺の場合は、死ぬ理由が理由だからな。
我仁田　と言うと？
ルイシ　さすがに言えねえよ。
我仁田　七歩さん？
七歩　保険金のためですね。義理の母の治療費目的の。

我仁田　ありがとうございます。
ルイシ　何で言うんだよ！
七歩　おおっと失敬。

七歩、口を押える。

ルイシ　遅えよ！
七歩　正確には延命治療費目的ですが。
ルイシ　詳細に言うんじゃねえ！
七歩　これまた失敬。

七歩、また口を押える。

ルイシ　だから遅えよ！！
我仁田　まあ、なんとなく事情は飲み込めましたが・・・。そんなことって可能なんですか
七歩　難しいことではありますが、できないことはありませんよ。私たちの手にかかれば。
差辻　そもそも・・・それって自殺って言えるんですか？
七歩　もちろん。「自分で死を選んで、実際に死ぬ」のであれば、どんな死因であれ、それは自殺です。本人が望むのならば、私たちはそれを叶えます。
我仁田　へえ、ずいぶんとゆるい条件なんですね。

ルイシ、何やら考え込んでいる。

ルイシ　・・・！　おい、七歩さん！

ルイシ、何かを思いついたような顔をして七歩に耳打ちをする。
七歩、ルイシの話を聞いていたずらっぽい笑みを浮かべる。

ルイシ　――――。できるか？
七歩　聞いてみないとわかりませんが可能なはずですよ。
ルイシ　頼む。

七歩、ポケットから携帯を取り出す。
七歩、電話をかける。

我仁田　いったい、どうしたんですか？
ルイシ　いいこと思い付いたんだよ。
差辻　いいことって…なんですか？
ルイシ　ああ、それはな――――。
七歹　ハイ皆様ご注目！

七歹、ドアを開ける。そこにはルイミが立っている。

ルイシ　ルイミ…！　何してんだよ。
ルイミ　気にならないわけないでしょ。あんなことあって。
七歹　ルイシ君がそうしたいと言うならもう一人伝えておいた方がいい人がいるんじゃないんですか。

ルイシ、ルイミと向き合う。

ルイシ　ルイミ…。
ルイミ　何よ…。

ルイシ、頭を下げる

ルイシ　…ごめん！！　俺、間違ってた！
ルイミ　……。
ルイシ　俺、ルイミとレイナさんのこと、考える振りをしてるだけだった。血はつながってないんだって、形だけなんだって、勘違いしてた。でも違ったんだ。……昨日のビンタ、痛かったけど、なんか嬉しかった。自分のこと考えて、こんなに真剣になってくれてるんだって気がして。家族なんだってようやくわかった気がして。
ルイミ　……別に、ただイラっとしただけよ。
ルイシ　そうだったとしても、嬉しかったんだ。ありがとう。
ルイミ　……どういたしまして。
ルイシ　それで俺考えたんだ、俺が死なないで――――ルイミから家族を奪わないで済む方法を。必死で。それでついさっき、漸(ようや)く思いついた。七歹さん。
七歹　――――ええ、ええ、はい。解りました。そういうことで。はい。先方に伝えておきます。失礼します。

七歹、携帯の通話終了ボタンを押して携帯を黒子達に渡す。

七歹　確認取れましたよ。ルイシくん。かなりグレーゾーンらしいですが、大丈夫ではあるみたいです。

ルイシ　よし・・・。

ルイミ　どういうこと？

我仁田　なんか僕たち完全に部外者だね。

差辻　もともとそうじゃないですか・・・。

七歹　すぐに解りますよ。・・・さて、ルイシ君？

ルイシ　ああ。七歹さん、

ルイシ、七歹に向き合う。

ルイシ　俺、壱岐 ルイシは、<自殺権>受け取り、さらにそれを壱岐 レイナ――――俺の、母さんに譲渡する。

七歹　死因は。

ルイシ　とても安らかな――――老衰で。

暗転

【ルイシの部屋／朝】

目覚まし時計の音がけたたましく響く。
数コールほど音がなってベッドがもぞもぞと動くが、すぐに止まる。
どうやら途中で寝てしまったようだ。
そこからまた数コールほど音がなる。
今度は目覚まし時計に手をかける――――と思いきや、クマの人形の頭を鷲掴みにしてベッドの中に引き込んだ。
そこからまた数コール音が鳴る。
部屋の外から妹、ルイミの声が聞こえてくる。

ルイミ　ルイシー！目覚ましうるさいよ！早く起きなー！

ルイシ、起きない。
鳴り響く目覚まし時計。

ルイミ　おーきーろー！
ルイシ　あーいーよー

ルイシ、やっと布団から出る。もたもたと目覚まし時計を止める。

ルイミ　ご飯できてるからねー
ルイシ　ういー

ルイシ、うつろうつろしながら、寝間着から着替えていく。
漸く着替え終わり、ドアの方に行くと思いきやベッドの前に立つ。
ルイシ、ベッドに倒れこむ。

ルイミ　いや起きろや！！

言いながら、ルイミが部屋に入ってくる。

ルイミ　もう目覚ましかけるなよ！

ルイミ、ルイシを枕でしばく。

ルイシ　いて、いてえよ！
ルイミ　嫌だったらサッサと起きな！

ルイミ、さらに激しくルイシをししばく。

ルイシ　はいはいはいはい！起きますよ！起きました！
ルイミ　はーい。おはようございます。
ルイシ　・・・・おはようございます。

ルイミ、カーテンを開け外の光を入れて、勉強机の前に座る。

ルイミ　早く降りて朝ごはん食べな。
ルイシ　朝ごはん何？
ルイミ　スクランブルエッグとバタートースト。
ルイシ　うまそう。
ルイミ　私が作ってるんだから。

（間）

ルイシ　レイナさん、な———
ルイミ　お母さん。
ルイシ　レイナさ———
ルイミ　お母さ———
ルイシ　母さんは、なんか言ってた？

ルイミ、満足そうな顔。

ルイミ　自分で聞けばいいのに。
ルイシ　今回の一件で、気恥ずかしいんだよ。匕夕さんめ、俺がお前に言ったこと、全部レイナさ———母さんに伝えやがって。
ルイミ　母さん喜んたと思うよ。ルイシの正直な気持ち聞けて。・・・病状は安定してるって。さすが政府。
ルイシ　最初聞いたとき、ビックリしただろうな。
ルイミ　私だってびっくりしたよ。あんだけの啖呵切った後に<自殺権>をお母さんにあげるって言ったんだから。

ルイシ　そりゃそうだろうな。

玄関の扉が開き、階段を上ってくる音。

差辻、扉を開けて入ってくる。

我仁田、窓から入ってくる。

我仁田　おはようございます。

ルイシ、上りかけの我仁田の頭を蹴飛ばして窓を閉める。

我仁田、叫び声。

差辻　おはようございます・・・。

ルイシ　もはや普通に入ってきてるな。

差辻　そちらこそ・・・、普通に・・・蹴落としてましたよね。

ルイシ　こう何回も来られたらああいう対応にもなるよ。

玄関の扉が開き、階段を慌てて駆け上ってくる音。

我仁田　殺す気ですか！？

ルイシ　窓から入ってくる限りはな。

我仁田、どすどす歩きながら中央まできて正座する。

我仁田　今日こそは話をして貰いますからね。

ルイシ　だから、話せる分は全部話したって。

我仁田　まだまだ話してもらいますよ！ まだルイシ君の小説を書ける程の取材が終わってませんから。

ルイシ　最高傑作はいいのかよ？

我仁田　<自殺権>手に入れることができなかったので、次にその機会が来るまでは別の作品を書くことにしたんです。それに、読者が望んでいるのは最終作じゃなくて次作だと言ったのはルイシ君じゃないですか。ルイシ君には、その言葉の責任を取ってもらいます。

ルイシ　それは、確かに言ったけど・・・

我仁田　それに僕は感動したんですよ！ あんな〈自殺権〉の使い方！ お母様の延命のために使うんだなんて。僕ですら想像できませんでした！

ルイシ　あれは俺の発想って言いうか匕歹さんの言葉があったおかげだって！

ルイシ、詰め寄ってきた我仁田の勢いにたじろぐ。

ルイミ　差辻さんは、今日は何故こちらに？
差辻　ああ、それが・・・昨日の夜に匕歹さんから・・・ここに来た方がいいと言われて。
ルイミ　え？ 匕歹さんが？ またどうして。
ルイシ　匕歹さんといえば、今考えるとあの人も不思議な人だよな。
我仁田　ちょっと、話題をそらそうとしないでください？
ルイシ　そういうわけじゃないって。お前だって、匕歹さんは不思議だと思うだろ？
我仁田　たしかにそうは思いますけど・・・。言われて見れば、なんだか全部を見透かしたような人でしたよね。
ルイシ　だろ？ もしかしたら、俺があのやり方を考え付くのも、あの人は予想していたのかもな。というか気付いたきっかけもあの人だし。
差辻　思いだしてみれば・・・あの人が確認を取った時も・・・・・、異様に早かったような気がします。
ルイシ　不思議だよなあ・・・。

（間）

部屋の中にドラムロールの音が響く、結果発表の時のような照明。
一同、驚く。

我仁田　なんですかこれは！？
差辻　うるさい・・・。
ルイシ　なあ。
ルイミ　これってあの時の。
匕歹　ハイ、ドーン！！

匕歹と、どこからか出てきてルイミを差す。
ドラムロールが止まり、ピンスポットがルイミに当たる。

匕歹　おめでとうございます！！ 壱岐 ルイミさん、あなたに<自殺権>が当たりました！

暗転

【ＦＩＮ】